



元気に遊び回る子ども達の笑い声に、どこか春の気配が混じってきました。日差しの柔らかさに、季節のバトンが確かに手渡されているのを感じます。

年長児にとってははいよいよ「卒園の時」… 小さな手で握っていた不安が、いつの間にか自信へと変わりました。悔し涙も挑戦の日々も、全てが「できた！」の力となり、今は大きなランドセルが似合う顔つきです（笑）寂しさはありますが、それ以上に小学校という新しい世界へ踏み出す誇らしさが広がっています。

つぼみぐみ・年少・中児の子ども達も、この一年で心も体もたくましくなりました。

できることがたくさん増え、友達の輪もどんどん広がり、自分から挑戦する姿も増えましたね（笑）

春からは、一つお兄さん、お姉さんに… 新しいクラス、新しい出会いへの期待が、子ども達の周りに優しく膨らんでいます。

別れは終わりではなく、次の一歩の始まり！ 子ども達一人ひとりの成長を胸に、温かな春を迎えたいと思います。

☆☆☆年中児の育ち☆☆☆

まさに“世界が広がった”一年でした。年少の頃は、教室でブロックやおままごとで夢中になり、自分の好きな遊びをじっくり楽しむ姿が中心でした。それが今では、友達の輪が大きく広がり、ホールや園庭へと舞台を移し、仲間と関わりながら遊ぶ姿があたり前になっています。

自分達でルールを決め、役割を決め、物語をどんどん展開させていく姿が見られ、遊びを“与えられる”ものから、“創り出す”ものへ… そこに大きな成長を感じます。

その分、思いのぶつかり合いも増えました。言葉の選び方、力加減、ちょっとしたトラブルも… その一つひとつが友達との関わり方を学ぶ大切な経験です。

4月からははいよいよ「白ゆりっ子のリーダー！」年長児としての自覚が芽生える中で、努力の楽しさや面白さを知り、仲間と力を合わせる喜びを感じ、自分の気持ちを上手にコントロールする力を育ててほしいと願っています。

この年中児の一年は「大きく伸びる！」その手応えを感じる一年でした（笑）



♪♪♪お別れ会♪♪♪

一年で一番温かく、ちょっぴり胸がキュッとする日…ホールには全園児が集まり、たくさん助けけてくれたお兄ちゃんお姉ちゃんへ「ありがとう」の気持ちを届けます。年長児からは進級児達へエールの歌を…心を込めた歌声が広がり、次のバトンが確かに手渡されていきます。

教師達も負けていません！楽しいゲームや工夫いっぱい企画で笑顔と歓声に包まれます。

さらにこの日の昼食は、職員室とトイレ以外ならどこでもOK！ホールでも廊下でも階段の踊場でも…好きなお友達と好きな場所でママの手作りお弁当を広げます。

学年の枠を越えて輪になる姿は、まさに白ゆりらしい光景です。笑って歌って食べて…心が繋がる一日です。

縁を生かす ～与えられた縁をどう生かすか～

故理事長が、毎年、卒園児の保護者にお伝えしていたお話です。

その先生が五年生になった時、一人、服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は、少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。ある時、少年の一年生からの記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良くでき、将来が楽しみ」とある。「間違いだ！他の子の記録に違いない！」と、先生は思った。

二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪化、疲れていて居眠りをする」三年生の後半の記録には「母親が病死、希望を失い悲しんでいる」とあり、四年生になると「父親は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力をふるう…」先生の胸に激しい痛みが走った。

ダメと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。放課後、先生は少年に声を掛けた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強をしない？わからないところは教えてあげるから…」少年は初めて笑った。それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。

授業で少年が初めて手を挙げた時、先生に大きな喜びが湧き起こった。少年は自信を持ち始めていた。クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。後で開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていた物に違いない。先生は、その一滴を付け、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気が付くと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ！」

六年生ではその少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に一枚のカードが届いた。「先生は、僕のお母さんのようです。そして、今まで出会った中で一番素晴らしい先生でした」

それから6年… またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担任をしてもらってとても幸せでした。お陰で、奨学金を貰って医学部に進学することができます。」

十年を経て、またカードが…そこには、先生に出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みがわかる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕は、五年生の時の先生を思い出します。あのままダメになってしまう僕を救って下さった先生を神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任をして下さった先生です！」そして一年…届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座って下さい！」と一行、書き添えられていた。

たった一年間の担任の先生との縁… その縁に少年は無数の光を見出し、それからの人生を生きた。人は誰でも無数の縁の中に生きている。大事なのは、与えられた縁をどう生かすかである。